

コレクション充実—図書寄贈者に感謝状

内田義彦文庫
児島襄文庫
高橋勇文庫



▲ 左から高橋勇さん、内田宣子さん、恵子さん、
児島暁さん、力さん

図書館に貴重図書を寄贈して下さった高橋勇さん(高橋勇文庫)、内田宣子さん・恵子さん(内田義彦文庫)、児島暁さん・力さん(児島襄文庫)に7月10日、出牛正芳理事長・学長、大庭健図書館長から感謝状と記念品が渡された。

内田義彦文庫は、故内田義彦本学名誉教授が収集・愛蔵された社会科学のほか、本学や文学など幅広い分野にわたる3352冊(和書3146冊・洋書206冊)のコレクションで、遺族の宣子夫人らが寄贈した。内田先生は1946年(昭21)から83年(昭58)まで、主に経済史の講義を担当され、商経学部長、評議員、理事などを歴任された。「経済学の生誕」(未来社、1953)は、日本におけるアダム・スミス研究の水準を飛躍的に高め、古典としての評価を確立しており、戦後の日本を代表する社会学者の一人。

児島襄文庫は、戦史研究家で、作家の故児島襄氏が収集・愛蔵された日本近代戦史関係8685冊(和書5341冊・中国語906冊・洋書2438冊)のコレクション。日露戦争から第二次世界大戦を中心とする戦争関係の図書資料が大半を占めており、当時の人間行動や社会環境を知る上で貴重な資料である。児島氏の著作81件142冊も含まれている。暁さん、力さんは子息にあたる。

高橋勇文庫(黒龍文庫)は、歴史資料収集家である高橋勇氏が収集した旧満州関係4845冊(和書)のコレクションである(ニュース専修第386号既報)。文庫の中には本学を1883年(明治16)に卒業し、中国新疆地方の視察に独行して明治22年に消息をたった浦敬一の伝記なども含まれている。文庫はいつでも図書館本館に所蔵され、OPACで検索することが出来、貸し出しも可能となっている。お問い合わせは図書館 Tel=044(911)1276へ。

【ニュース専修2004年8月号面】

全学FD委員会

2006年度入学者問題に関する研究会開催



▲多数の教職員がつめかけた全学FD委員会の研究会

見た大学選択のポイントが示された。

第二部では、専大附属高校の根本欣哉国語科教諭ら6人が、新課程での取り組みと現状を説明した。

全学FD委員会(広瀬正克委員長)では、新学習指導要領、いわゆる新課程による学習を修めてきた生徒たちが入学してくる06年度にどのような対応が必要であるかを考察するため、7月27日、生田キャンパスで研究会を開いた。出牛正芳理事長・学長ら約70人の教職員が参加、活発な質疑応答も行われた。

第一部では、(株)アイ・ピー・ユー・コーポレーション代表取締役社長の遠山智一氏が「新課程で受験生の学力はどうか変わるのか」を詳細なデータを基に解説した後、受験生の目から

【ニュース専修2004年8月号5面】

初の法科大学院FD講演会



▲米国のロースクール、司法試験について講演する下平高志氏

法科大学院FD委員会(高木徹委員長)では、教育内容の組織的な統一を図るため、「アメリカのロースクールの教育方法について」を統一テーマに7月31日、神田キャンパスで初の講演会を開催した。下平孝志氏(旭化成総務センター法務室主査・ニューヨーク州弁護士)が、「米国の司法試験・弁護士実務にどのように直結しているか」、山本隆司氏(インフォテック法律事務所弁護士・弁理士・ニューヨーク州弁護士)が「日本の法科大学院の参考になりうるか」と題した講演を行った。会に先立ち、後期以後の授業の参考・改善に役立てる情報交換の場として教員懇談会も開催された。

【ニュース専修2004年8月号5面】

専大校友を訪ねて

温かな視線で選手見つめる

報知新聞東京本社編集局運動第二部

大上(おおうえ) とも子さん(旧姓 佐々木・平元文)



「スポーツ報知」でサッカー日本代表・同女子代表などを担当している。

小学生の頃、「月刊ジャイアンツ」に投稿したほどの巨人ファン。テレビの試合でスコアブックのつけ方を勉強していたという。宮城県・古川女子高から文学部英米文学科へ。運動経験はなかったが「大学ではスポーツを」と入った洋弓部(現・アーチェリー部)で女子主将を務めた。「いつもビリだったのに、主将として先頭を走らなくてはならなくなって、『絶対無理』と思っていたのですが走れた。『気持ち』で人は変わる、と気づいた貴重な経験でした」

一番好きなこと=「スポーツ」に携わる仕事をしたいと、就職課主催のマスコミ講座に。「当時、マスコミセ

ミナーの動きは友人からの情報だけが頼り。同じ目的を持った仲間がいる、という安心感で就職活動を乗り越えました」

願いが叶い、同社4人目の女性記者となる。ファッションや旅行をメインとする婦人家庭課を経て、Jリーグ発足が発表された91年、現在の部に異動。「恥ずかしながらルールブック片手に取材に出ていましたが、Jリーグが発展していく勢いを『目撃』出来たことは幸せでした」。特に思い入れが強いのはカズ(三浦知良)選手。

「年齢が同じこともあって、本音で話してくれる。出会った選手がさまざまなシーンで活躍しているのを見ると、私も励まされます。『人』とのつながりが仕事を続けさせてくれ、続けてきたからこそ、出来ることがあると感じています」

同社ホームページで、『佐々木とも子のアイ・コンタクト』も連載中。スポーツだけでなく、日常のさまざまな出来事から感じたことが温かい目線で綴られている。「読むと優しい気持ちになれる、そんなエッセイを目指しています」というコラムにアクセスしてみたいかがだろうか。(http://www.hochi.co.jp)

【ニュース専修2004年8月号5面】